受難節第４主日礼拝説教「みんな《油》を注がれた」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年3月10日

【旧約聖書日課】サムエル記上　9章27節～10章7節

９27町外れまで下って来ると、サムエルはサウルに言った。「従者に、我々より
先に行くよう命じ、あなたはしばらくここにいてください。神の言葉をあなたに
お聞かせします。」従者は先に行った。
１０1サムエルは油の壺を取り、サウルの頭に油を注ぎ、彼に口づけして、言っ
た。「主があなたに油を注ぎ、御自分の嗣業の民の指導者とされたのです。2今
日、あなたがわたしのもとを去って行くと、ベニヤミン領のツェルツァにあるラ
ケルの墓の脇で二人の男に出会います。二人はあなたに言うでしょう。『あなた
が見つけようと出かけて行ったろばは見つかりました。父上はろばのことは忘れ、
専らあなたたちのことを気遣って、息子のためにどうしたらよいか、とおっしゃ
っています。』3また、そこから更に進み、タボルの樫の木まで行くと、そこで、
ベテルに神を拝みに上る三人の男に出会います。一人は子山羊三匹を連れ、一人
はパン三個を持ち、一人はぶどう酒一袋を持っています。4あなたに挨拶し、二
個のパンをくれますから、彼らの手から受け取りなさい。5それから、ペリシテ
人の守備隊がいるギブア・エロヒムに向かいなさい。町に入るとき、琴、太鼓、
笛、竪琴を持った人々を先頭にして、聖なる高台から下って来る預言者の一団に
出会います。彼らは預言する状態になっています。6主の霊があなたに激しく降
り、あなたも彼らと共に預言する状態になり、あなたは別人のようになるでしょ
う。7これらのしるしがあなたに降ったら、しようと思うことは何でもしなさい。
神があなたと共におられるのです。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二　1章15～22節

15このような確信に支えられて、わたしは、あなたがたがもう一度恵みを受ける
ようにと、まずあなたがたのところへ行く計画を立てました。16そして、そちら
を経由してマケドニア州に赴き、マケドニア州から再びそちらに戻って、ユダヤ
へ送り出してもらおうと考えたのでした。17このような計画を立てたのは、軽は
ずみだったでしょうか。それとも、わたしが計画するのは、人間的な考えによる
ことで、わたしにとって「然り、然り」が同時に「否、否」となるのでしょうか。
18神は真実な方です。だから、あなたがたに向けたわたしたちの言葉は、「然り」
であると同時に「否」であるというものではありません。19わたしたち、つまり、
わたしとシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子イエス・キリ
ストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方にお
いては「然り」だけが実現したのです。20神の約束は、ことごとくこの方におい
て「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方
を通して「アーメン」と唱えます。21わたしたちとあなたがたとをキリストに固
く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは、神です。22神はまた、わ
たしたちに証印を押して、保証としてわたしたちの心に“霊”を与えてくださいま
した。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　12章1～8節

[1]過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者
の中からよみがえらせたラザロがいた。[2]イエスのためにそこで夕食が用意され、
マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中に
いた。[3]そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って
来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっ
ぱいになった。[4]弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言っ
た。[5]「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかった
のか。」[6]彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではな
い。彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていた
からである。[7]イエスは言われた。「この人のするままにさせておきなさい。わ
たしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。[8]貧しい人々はいつも
あなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。」

「ナルドの香油」の香り【こども説教のために】

「受難節（レント）」の四十日の旅は、後半を迎えました。その先に控える「復活祭（イースター）」を迎える前に、わたしたちは、主イエスの十字架を記念しなければなりません。ご復活なさった主イエスは、ご復活の前に、まず十字架につけられて死に、墓に葬られたのです。

主イエスが十字架で死なれて葬られる六日前、主**イエスのために**夕食の席が用意されていました。主イエスの友人たち、ラザロと二人の姉妹、マルタとマリアの家でのことです。十二人の弟子たちも一緒に招かれていたことでしょう。もしかすると、いつものように主イエスは、「罪人や徴税人」と呼ばれる人たち、また貧しい人たちを連れて来られていたかもしれません。

皆が食事の席に着いていると、マリアが壺を持って主イエスに近づいてきました。そして、その壺から香油を注ぎ出して主**イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐ**い始めたのです。それは、**純粋で非常に高価なナルドの香油**でした。マリアは壺に入った香油を惜しげもなく注いでしまったようです。家中が**ナルドの香油の香りでいっぱいになった**のです。

びっくりした弟子のユダは、マリアを叱りました、「**なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか**」。たしかに、主イエスならば、ご自分のことよりも、貧しい人々のためにと考えて、行動なさったでしょう。けれども、主イエスは言われました、「**この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから**」。

弟子たちの教会は、**ナルドの香油**の香りを嗅ぐたびに、このときのことを思い出し、主イエスが十字架で死なれるまでの日々を記念してきたのです。

《油》を注がれる

わたしたちの教会では、今日の午後、一名の洗礼志願者の試問会を予定しています。これが御心であるならば、主のご復活の祝いの日には、新しくキリストと結ばれた者として生まれる人の誕生を見ることになるでしょう。《神の家族》の教会に、新しい家族が生まれるのです。

わたしは牧師として何十人もの方の洗礼を執り行わせていただいてきましたが、いつも出来たらよいと思いながら教団の「式文」にないために出来ずにきたことがあります。洗礼式の中で受洗者に油を塗る、ということです。古い時代の教会では、志願者を裸にして全身を水に沈める洗礼を施した後、全身に油を塗ってから、白い衣を着せたそうです。現代でも古い伝統を受け継いでいる教会では、洗礼式に際して受洗者の額に油を塗る習慣が残っています。洗礼式だけでなく、教会の重要な儀式のほとんどで、油を塗るという手順が含まれているのです。キリストに結ばれた者として歩もうとしている人に油を塗ることを、教会は大切にしてきました。

わたしたちが主イエスを指してお呼びする「キリスト」は、「油注がれた者」という意味のギリシア語「クリストス」に由来します。旧約聖書のヘブライ語では「メシア」が同じ意味の語です。「主イエス・キリスト」とお呼びするとき、わたしたちは、「主イエス、油注がれた方」とお呼びしているのです。

二千年前の当時、主イエスだけが油を塗られた唯一の人だったわけではありません。油を塗る習慣は、広く人々の間で行われていた日常的なことでした。ただ、特別な「油注ぎの儀式」が知られていたのです。神から使命を託されて遣わされる者に、そのしるしとして与えられる「油注ぎの儀式」です。「サムエル記」が伝える、後にイスラエル王国の王となったサウルも、そのような「油注ぎの儀式」を密かに受けた一人でした。また、サウル王の後に「ユダとイスラエルの王」となったダビデも、サウルと同じく預言者サムエルによって密かに「油注ぎの儀式」を受けた人だったといいます（サム上 16 章)。そのことから、「油注ぎ」を受けた「油注がれた者」は、何よりも「王」をイメージさせるものになったようです。

主イエスが、「キリスト」と呼ばれるにふさわしい「油注ぎの儀式」をいつお受けになられたのか、はっきりしません。ある人たちは、洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたときに、「聖霊による油注ぎ」をお受けになられたのだと考えました。それで、弟子たちの教会は主イエスと同じ洗礼を受けさせるために、洗礼式に際して油を塗るようになったのでしょう。使徒パウロも教えているように、洗礼によって神は「**キリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださった**」と信じたのです。それは、大胆な考えです。わたしたちも「油注がれた者」＝「キリスト」の一人だというのですから。

「葬りの日のために」

もちろんご安心ください。わたしは、皆さんに「キリスト」を自称するようにお勧めしたりはしません。また、わたしが「キリスト」を称して皆さんを思いのままに操ったりすることも決してないと誓いましょう。

それでも、わたしたちは、なお、「油を注がれた者」と呼ばれていることの意味を考えないわけにはいきません。同じように、わたしたちは、主イエスを「神の御子」とお呼びし、しかも「独り子」とお呼びしながら、わたしたちも「神の子とされた」と教えられています。その意味を、わたしたちはよく考えてみなければいけない、と思うのです。

荒野で断食をして過ごされた四十日に、主イエスは悪魔の誘惑をお受けになられました。悪魔は問うたのです、「神の子なら、この石がパンになるように命じたらどうだ」(ルカ 4:3)、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」(同 4:9)。主イエスでさえ、「神の子」であることの意味を問われたのであれば、わたしたちがその意味を自問しないでよい理由はありません。「油注がれた者」の意味を問うのも、同じことです。

弟子たちの教会は、主イエスが「キリスト」であること、つまり「油注がれた者」であることの意味を、一つの出来事と結びつけて考えてきたようです。「ナルドの香油」の出来事です。

それは、厳密な意味で「油注ぎの儀式」だったとは言えないでしょう。敢えて言えば、それは大切な来客のためのおもてなしとして行われたことです。香油を注いだマリアは、主イエスを、他の誰よりも大切なお方としてお迎えした。そういうことかもしれません。もちろん、そのときマルタも、給仕をして食事を整えることで、その気持ちを表していました。ラザロも、一緒に食卓についてホストとしてもてなしに精を出し、主イエスに特別な来客であることが伝わるように励んでいたことでしょう。

ところが、弟子たちの教会は、もてなしとは別のことを、「ナルドの香油」と結びつけて伝えました。主イエスの「葬りの記念」です。この出来事で、主イエスは、十字架につけられ、葬られる方として、「油注がれた者」となられた。主イエスは、十字架へとご自分を差し出され、すべてを捨てて葬られたお方として、このとき香油の油を注がれたのだと、弟子たちは理解しました。この出来事を、主イエスの記念に不可欠なこととしてきたのです。

洗礼をすでに受けた皆さん。これから洗礼に臨まれる皆さん。いつか洗礼を受けられる皆さん。皆さんは、洗礼によってキリストと結ばれます。油注がれた者とされます。皆、キリストと共に葬られるのです。古い自分は捨てられ、葬られるのです。新しい「神の子」としての命が始まるのです。「ナルドの香油」の香る中、主イエスとわたしたちの「葬り」が始まります。